

山寺参拝（山形県）

平成 25 年 5 月 16、17 日と駒沢大学WV部の 9 人



が、同期会を山形県の山寺で行った。

山形県には、大学 2 年の夏合宿を鳥海班、出羽三山班にて行い酒田市の飛島に集結という長い合宿の思い出がある。



さて芭蕉で有名な山寺であるが、正式には宝珠山立石寺で平安時代の貞観 2 年（860 年）に慈覚大師により開かれた天台宗の古刹で、古くから、みちのくを代表する霊場として信仰を集めてきた。自然と信仰の一体感というか、自然信仰そのものを体感できる、まさに山寺でもある。



この地方では、広く宗派をこえた信仰を集め、死者の赴く山として、遺骨の一部を立石寺奥の院の納骨堂に納め、供養をしてもらう風習がある。至るところに、亡くなった人の戒名を書いた卒塔婆や後生車、岩壁には刻まれた岩塔婆、墓碑などが納められている。



山門から奥の院までの階段は 1015 段。少し登った所



に「姥堂（うばどう）」（間口 2.7m、奥行 1.8m）という草ぶきの建物が、大変珍しい「奪衣婆（だつえば）」の像に出会った。

十王経に書かれた鬼婆で、三途の川のほとりにいて亡者の着物を奪い取るという凄い顔





をした奪衣婆の像とお地藏様が並んで祭られている。姥堂は、これを境にした極楽(上方)と地獄(下方)との分かれ目とされ、極楽浄土への入口と説かれている。

案内には、「堂の近くに湧き出る石浄水で心と体を清め、新しい着物に着替えて極楽に昇り、古い衣服は堂の本尊である奪衣婆に奉納する」と書かれていました。

いずれにしてもこの「奪衣婆(だつえば)」の像は「絵で見る一
地獄と極楽一」の絵図や水木しげるさんの「あの世辞典」に描かれているが、像として見るの

は初めてで大変興味を持った。

普通、死者は「閻魔(えんま)様」の前へ行く途中に三途の川を渡るとされている。その川岸に衣領樹(えりょうじゅ)という大木があり、その下に脱衣婆(だつえば)がいて亡者の着衣をはぎ、それを懸衣翁(けんえおう)が大木にかける。生前の罪の軽重によって枝の垂れ方が違う」と説明されています。



山寺も、死者の赴く霊地として、十王経の思想を多分に秘めています。昔は、仁王門のところに

十王堂が建てられていたそうですが、現



在では、二王門の中の仁王像の傍らに閻魔様をはじめ、十王様のお木造が祭られています

そんな山寺ですが、山間の建物群も壮観です。五大堂や開山堂は展望台にもなり、そこから山寺の門前町や、向こうの山々を眺めることができます。

我々が、参拝した時は、ちょうど本堂である「根本中堂」の国宝の「薬師如来坐像」の50年に1度のお開帳の時期と重なり、沢山の参拝の方々が詣りされてきました。



山寺は、今なお霊場としての性格を、色濃く残している寺でした。皆さん、ご苦労様でした。

平成 25 年 5 月 23 日

